

生体機能検査学特論Ⅱ (Advance of Clinical PhysiologyⅡ)

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
伊藤 康宏、榎本 喜彦	1年次後期	選択	2	30	講義	あり	巻末掲載	可
授業概要 (内容と進め方)及び 課題に対する フィードバック方法	生体機能検査学特論Ⅱでは、生体の外界への適応や、外界から入力される情報に対する生理機能の変化について学修する。本講では視覚・聴覚などの特殊感覚と、体位などの体性感覚に焦点をあて、応力への生体反応を学修する。課題に対するフィードバック方法/レポートに対して討論するほかコメントをつけて返却する。実務家教員(伊藤、榎本)が講義を進める。							
授業の位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー②「専門職業人として医療に対する幅広い知識と技能を駆使し、高度な臨床検査を实践できる。」及び⑤「自ら積極的に臨床検査学の課題を探索し、主体的に解決しようとする能力と研究的視点を備え、科学的探究心を持ちながら継続的に研究を遂行できる。」の達成に寄与している。							
到達目標 (履修者が到達すべき目標)	<ol style="list-style-type: none"> 1. ストレスとは何か理解し、説明できる。 2. ストレスを発生させる外力に抗する応答系について説明できる。 3. ストレス時の感覚変化について説明できる。 							
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	<p>第1回～第15回事前学習：事前に計画されている単元について予習を行っておく/分からない用語については調べておく(各30分)</p> <p>第1回～第15回事後学習：講義内容で不明な点は、講義終了直後もしくはオフィスアワーを利用して質問するなどして明確にするよう努める/毎回の講義の復習を十分行うこと。神経生理学についてよく理解すること。(各30分)</p> <p>※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間(2単位15回科目の場合：予習+復習4時間/1回)(1単位15回科目の場合：予習+復習1時間/1回)(1単位8回科目の場合：予習+復習4時間/1回)を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。</p>							
授業計画	第1回	外力への応答系の理解と歴史					伊藤康宏	
	第2回	セリエのストレス学説と歪応力					伊藤康宏	
	第3回	心理量と物理量、ウェーバーフェヒナーの法則他					伊藤康宏	
	第4回	視床下部一下垂体系					伊藤康宏	
	第5回	神経系と液性因子					伊藤康宏	
	第6回	体位と重力による感覚の変化					伊藤康宏	
	第7回	脳腸相関、脳腸軸 (brain-gut axis)					伊藤康宏	
	第8回	ストレス反応各論1：潜伏感染しているウイルスが再活性化する要因					榎本喜彦	
	第9回	ストレス反応各論2：ストレスと疲労によるウイルス量の変化					榎本喜彦	
	第10回	ストレス反応各論3：酸化ストレスの発生					榎本喜彦	
	第11回	ストレス反応各論4：抗ストレス反応と細胞間ネットワーク					榎本喜彦	
	第12回	ストレスが中枢神経系に及ぼす影響と中枢神経系の疾患					榎本喜彦	
	第13回	ストレスが自律神経に及ぼす影響と消化器系の疾患					榎本喜彦	
	第14回	ストレスが特殊感覚に及ぼす影響1：感覚の変化					榎本喜彦	
	第15回	ストレスを抑制する方法					榎本喜彦	
評価方法 評価基準	質疑応答、課題レポートなどにより到達目標に対する到達度を総合的に評価する(100%)							
教科書	医学書院『標準生理学』ほか			参考書等		担当教員が資料を配布する。		
学生への メッセージ	ストレス感とは身体からのメッセージです。ストレスは中枢神経系を徐々に侵害し、特殊感覚・体性感覚に影響を及ぼします。また、ストレスの心身への影響はHPA軸を介して全身を障害します。ストレスの意味を勉強しましょう。							